ブレイク思想からみた資本主義

前　島　賢　土

1　はじめに

本稿では、イギリスの詩人であるブレイクの思想からみた資本主義を考察する。その際には、資本の論理や意志にも注目する。

本稿では、資料としてブレイクの詩集を用いる。

2　イーグルトンの詩の定義と考察

イギリスの詩人であるブレイクの思想からみた資本主義を考察する前に、まず、はじめに詩の定義を行う。

イギリスの著名なマルクス主義文学批評家のイーグルトンは、詩に関して、次のように定義している。

「詩とは、フィクション（虚構）で、言語上の創意に富む、倫理的な発言であり、各行をどこで切るかは、プリンターやワープロではなく、作者自身が決めるものである」（Eagleton，2007：訳書57）。

イーグルトンは、上記の詩の定義に続けて、詩に関する考察を行っている。

イーグルトンは、詩に関して、詩と倫理の観点から、次のように考察している。

「詩は倫理的な発言だ。もちろん、何かの掟をかざして手厳しい批判を浴びせるからではなく、さまざまな人間的価値や意味や目的にこだわるからだ」（Eagleton，2007：訳書66）。

また、イーグルトンは、詩に関して、詩とフィクションの観点から、次のように考察している。

「詩は物質的な手がかりや拘束が何もないところで、意味を表わそうとする言語なのだ」（Eagleton，2007：訳書75）。

さらに、イーグルトンは、詩に関して、詩と実用性の観点から、次のように考察している。

「詩は自分の語ることを『非実用的』に受け取るよう読者をうながす、というものだ。詩は実際的・直接的な意味で、何ごとかを達成しようとするものではない―ただし、もっと間接的な意味では、詩は何かをなしとげることもあるのだが」（Eagleton，2007：訳書92）。

最後に、イーグルトンは、詩に関して、言語の観点から、次のように考察している。

「詩の特徴としてよく言われるのは、自分に注意を引きつける言語、自分に焦点を当てる言語、あるいは（記号論の用語でいえば）記号表現が記号内容より優位に立つ言語、などだ」（Eagleton，2007：訳書101）。

以上、イーグルトンによる詩の定義とイーグルトンの詩に関する考察をみてきた。本稿では、詩の定義として、イーグルトンの詩の定義を採用する。

イーグルトンが論じたように、詩はフィクション（虚構）で、現実や現実の真理を明らかにするものではない。しかし、詩は現実の真理を明らかにするヒントとなるものである。従って、詩は、現実の真理を理解する上で重要なものである。

3　ブレイクの経歴

本章では、ブレイクの経歴をみていく。

ブレイクはイギリス産業革命期の詩人で、イギリス資本主義初期の詩人である。

ウィリアム・ブレイク（William Blake）は1757年にロンドンで生まれた。ブレイクの父親は靴下商のジェイムズで、母親はキャサリン・ハーミテージである。両親はともに非国教徒であった。1772年に、ブレイクは彫版師ジェイムズ・バザイアのもとに入門し、７年間の徒弟修業を始めた。1779年に徒弟修業が終わり、ブレイクは、その後ロイヤル・アカデミー付属美術学校の研究生となった。1782年、ブレイクは菜園経営者の娘キャサリンと結婚した。1783年に、ブレイクの処女詩集『詩的素描』が出来上がったが、販売はされなかった。1789年

に『セルの書』が出来上がる。1793年に、『アルビヨンの娘たちの幻覚』が製作された。1794年に、『無垢と経験の歌』が出版された。ブレイクの生きた時代には、1789年にフランス革命が生じたが、ブレイクは革命というものに共感を抱き続けた。ブレイクの性格は頑固であった。また、ブレイクは怒りっぽい性格であった。ブレイクは貧困の人生を送った。ブレイクは1827年にロンドンで亡くなった（松島，2004：321-341）。

ブレイクは彫版師であり、画家であり、そして、詩人であった。また、ブレイクは19世紀初頭に活躍するイギリスのロマン派詩人の先駆けであった。

4　ブレイクの詩と思想

本章では、ブレイクの詩をみていき、そこから、ブレイクの思想を見出していく。

以下、ブレイクの詩を引用する。

「『煙突掃除の少年』　母さんが死んだとき、ぼくはまだ幼かったけれど、父さんがぼくを売った、ぼくの舌が『煤払い、煤払い』と、まだよくまわらないのに。それでぼくは煙突を掃除し、煤まみれになって眠る。子羊の背中みたいに巻毛のちびのトム・デイカは髪の毛を剃られたとき泣いた。ぼくは言ってあげた。『泣くなよ、トム。気にするな、坊主頭になれば、おまえの白い髪の毛は煤によごれないよ』。トムは泣きやんだけれど、その晩すぐに眠っているとこんな光景を見た。何千人もの煙突掃除、ディック、ジョー、ネッド、ジャックなどが一人残らず黒いお棺に閉じ込められていた。すると輝く鍵を持った天使がやって来て、お棺を開けてくれてみんなを出してくれた。みんなはとび跳ね、笑いながら緑の野原を駆けまわり川で洗いきよめ、日を浴びて体が輝く。それから、白い裸のまま、煤袋を置き去りにして、雲に乗り、風の中を遊んだ。天使はトムに言った。よい子になれば、神さまがお父さんになってくださり、喜びの尽きる日はないよ、と。ここでトムは目が覚めた。ぼくたちは暗いうちに起き、煤袋と煤はけを持って、仕事に出かけた。とても寒い朝だったけれど、トムは幸せで、暖かだった。だから、みんなが義務を果せば、何も心配はありません」（『対訳　ブレイク詩集』岩波書店，2004年：39-41頁）。

「『聖木曜日』　これが聖なることなのか、富んで実り豊かな国に、幼な子たちが惨めな状態にされ、冷たい強欲な手で育てられるのを見ることが。あの震えわななく叫びが歌なのか。あれを喜びの歌といえるのか。そしてあんなに多くの子どもが貧しいのか。ここは貧困の国だ！そして、彼らのために日は決して輝かない。そして、彼らの田畑は荒れ干からびている。そして、彼らの道には茨がはびこる。そこは永遠の冬だ。なぜなら、日の照るところはどこであれ、雨の降るところはどこであれ、幼な子がひもじい思いをすることは決してなく、貧乏が心を脅かすこともないからだ」（『対訳　ブレイク詩集』岩波書店，2004年：89-91頁）。

「『煙突掃除の少年』　雪のなかを小さな黒いものが、『煤払い！煤払い！』と悲しい声をはりあげて通る。『おまえの父さんと母さんはどこにいるんだい？』『二人とも教会にお祈りに行ってるよ。ぼくは荒野にいても楽しく、冬の雪のなかでも笑っていたので、両親はぼくに死の着物をきせ、悲しみの歌をうたうようにしこんだのさ。そしてぼくが楽しく踊り歌っているので、両親はぼくに少しもひどいことをしたとは思わず、ぼくには惨めさで天国をつくっている神さまや坊さまや王さまを崇めにいくのさ』」（『対訳　ブレイク詩集』岩波書店，2004年：105頁）。

「『ロンドン』　特権ずくめのテムズ川の流れに沿い、特権ずくめの街々を歩きまわり、行き来する人の顔に私が認めるものは虚弱のしるし、苦悩のしるし。あらゆる人のあらゆる叫びに、あらゆる幼な子の恐怖の叫びに。あらゆる声に、あらゆる呪いに、心を縛る枷のひびきを私は聞く。煙突掃除の少年の叫びが黒ずみわたる教会をすさまじくし、不幸な兵士のため息は血潮となって、王宮の壁をつたう。それにもまして深夜の街に私は聞く、なんとも年若い娼婦の呪い声が生まれたばかりの乳のみ児の涙を枯らし、結婚の柩車を疫病で台なしにするのを」（『対訳　ブレイク詩集』岩波書店，2004年：127-129頁）。

「『無垢の予兆』　一粒の砂にも世界を、一輪の野の花にも天国を見、君の掌のうちに無限を一時のうちに永遠を握る」（『対訳　ブレイク詩集』岩波書店，2004年：319頁）。

以上、ブレイクの詩をみてきた。これらのブレイ

クの詩から、ブレイクの思想を論述する。

二つの『煙突掃除の少年』という詩から、厳しい労働条件の下で、悲惨な生活を送っている煙突掃除の少年たちへのブレイクの同情の思想が見出される。煙突掃除の少年たちは資本主義社会の最底辺に位置する人々である。即ち、資本主義社会の最底辺に位置する人々へのブレイクの同情の思想、また、少年という弱い存在へのブレイクの同情の思想が見出される。

『聖木曜日』という詩から、産業革命当時のイギリスの格差と貧困へのブレイクの憤りの思想が見出される。また、貧困な子供たちへの同情の思想が見出される。換言すれば、産業革命当時の格差や貧困といった資本主義社会の社会病理へのブレイクの義憤の思想が見出される。

『ロンドン』という詩から、特権階級へのブレイクの怒りの思想、また、煙突掃除の少年や娼婦へのブレイクの同情の思想が見出される。特権階級には資本家階級、ブルジョワジーも含まれると思われる。彼らは資本主義社会における上層階級である。煙突掃除の少年や娼婦は資本主義社会の最底辺に位置する人々である。即ち、『ロンドン』という詩から、資本主義社会における上層階級へのブレイクの怒りの思想、また、資本主義社会の最底辺に位置する人々へのブレイクの同情の思想が見出される。

『無垢の予兆』という詩から、小さきものの尊重というブレイクの思想が見出される。小さきものの尊重という思想は、資本主義社会の最底辺に位置する人々への同情の思想、また、少年という弱い存在への同情の思想と通底するものである。

以上みてきたように、ブレイクには、資本主義社会の最底辺に位置する人々への同情の思想、少年という弱い存在への同情の思想、産業革命当時の格差や貧困といった資本主義社会の社会病理への義憤の思想、資本主義社会における上層階級への怒りの思想が見出される。これらの思想から、ブレイクは、産業革命当時のイギリスという資本主義社会に対して批判的であったことが分かる。ブレイクには資本主義社会に対して批判的な思想が見出される。左翼というものを反体制的勢力と定義するならば、ブレイクは資本主義社会に対して批判的であったことから、ブレイクは反体制的詩人であり、左翼的な詩人であったことが分かる。

また、ブレイクにおける小さきものの尊重という思想、少年という弱い存在への同情の思想からは、ブレイクが強者よりも弱者に寄り添う詩人であったことが分かる。産業革命期のイギリスという資本主義社会は弱肉強食の社会である。このような社会において、弱者に寄り添うということは、それだけで、ブレイクが資本主義社会に対して批判的であり、ブレイクが反体制的詩人であり、左翼的な詩人であったことの証明になる。

5　資本主義の定義

４章では、ブレイクの詩をみて、ブレイクの思想を見出した。ブレイクには資本主義社会に対して批判的な思想が見出された。本章では、ブレイクが生きた、また、現在の我々日本人が生きている資本主義を定義する。

資本主義を定義する前に、資本主義の基礎である資本に関する定義を行う。マルクスは資本に関して、次のように考察している。

「最初に前貸しされた価値は、流通のなかでただ自分を保存するだけではなく、そのなかで自分の価値量を変え、剰余価値をつけ加えるのであり、言い換えれば自分を価値増殖するのである。そして、この運動がこの価値を資本に転化させるのである」（Marx,［1867］1962：訳書196）。

「生産手段は、労働者によって彼の生産的活動の素材的要素として消費されるのではなく、労働者を生産手段自身の生活過程の酵素として消費するのであり、そして、資本の生活過程とは、自分自身を増殖する価値としての資本の運動にほかならないのである」（Marx,［1867］1962：訳書408）。

「貨幣は、また同様に商品も、それ自体で、潜在的に、潜勢的に、資本であるということ、貨幣も商品も資本として売られることができるということ、また、それらがこの形態では他人の労働にたいする指揮権であり、他人の労働の取得への要求権を与えるものであり、したがってまた自分を増殖する価値であるということである」（Marx,［1894］1964：訳書445）。

マルクス経済学者の飯田は、資本に関して、次のように定義している。

「資本を概念規定すれば、それは自己増殖する価

値あるいは自己増殖する価値の運動体、ということになるであろう」（飯田，2016：63）。

以上みてきたマルクスの資本に関する考察と飯田による資本の定義を参考にして、筆者は資本を次のように定義する。

＜資本とは、自己増殖する価値の運動体である＞

以上のように定義された資本はそれ特有の論理を持つ。即ち、資本は資本の論理を持つ。

飯田は資本の論理に関して、次のように考察している。

「終わりなき自己増殖（無限の剰余価値の追求と獲得）、生産のための生産、蓄積のための蓄積、そして運動それ自体の継続性の確保、これが資本の論理の内容である」（飯田，2016：76）。

以上みた飯田による資本の論理の考察を参考にして、筆者は資本の論理を次のように定義する。

＜資本の論理とは、無限の剰余価値の追求と獲得、生産のための生産、蓄積のための蓄積、運動それ自体の継続性の確保という論理である＞

今まで行った資本の定義と資本の論理の定義に基づき、筆者は資本主義を次のように定義する。

＜資本主義とは、自己増殖する価値の運動体である資本に基づき、資本の論理が貫徹された経済である＞

資本主義は、終わりなき自己増殖を行い、無限の剰余価値の追求と獲得を行い、手段が目的と化した生産のための生産を行い、また同じく、手段が目的と化した蓄積のための蓄積を行い、資本の運動それ自体の継続性の確保を行う経済である。

6　資本主義における意志

５章では、資本主義の定義をみてきた。この資本主義には意志が含まれている。本章では、資本主義の基礎である資本における意志、資本主義における意志を考察する。

資本における意志、資本主義における意志を考察する前に、意志の定義を行う。

カントは意志に関して、次のように論じている。

「意志は、生命をもつ存在者が理性を具えている限り、かかる存在者に属する一種の原因性である。また自由は、この種の原因性―すなわちこれらの存在者を外的に規定するような原因にかかわりなく作用し得るという特性である。（中略）意志の自由は、自律―すなわち自分が自分自身に対して法則であるという、意志の特性をほかにして、いったいなんであり得るだろうか」（Kant，1785：訳書140-141）。

「意志のいかなる規定根拠も、普遍的立法という単なる形式以外の規定根拠では、意志に対して法則となり得ないとすれば、かかる意志は現象の自然法則―すなわち継起する現象を支配するところの原因性の法則にいささかもかかわりがないと考えられねばならない、そしてこのように自然法則にまったくかかわりがないということは、最も厳密な意味における―換言すれば、先験的意味における自由と呼ばれる」（Kant，1788：訳書68-69）。

ショーペンハウアーは意志に関して、次のように論じている。

「実際、いっさいの目標がないということ、いっさいの限界がないということは、意志そのものの本質に属している。意志は終わるところを知らぬ努力である」（Schopenhauer，1819：訳書366）。

エンゲルスは意志に関して、次のように論じている。

「意志の自由とは、事柄についての知識をもって決定をおこなう能力をさすものにほかならない」（Engels，［1878］1962：訳書118）。

テンニースは意志に関して、次のように論じている。

「意志とは、対象そのものと結びつき、それに対応する活動への傾向であり準備である」（Tönnies，1887：訳書173）。

イーグルトンは意志に関して、次のように論じている。

「欲望が支配しにくいのに対し、意志は支配そのものである。恐ろしいほど容赦のない衝動であって、たじろぐことや抑制を知らず、皮肉や自己不信もない。ひたすら世界への欲望を露わにするから、崇高な怒りに駆られて世界を粉々にすりつぶし、満足を知らぬ胃に世界を詰め込む。意志は自分が見るものをすべて愛するように見えるが、密かに愛しているのは自分自身である」（Eagleton，2003：訳書228）。

また、イーグルトンは意志に関して、次のようにも論じている。

「中産階級社会が、まだ誕生したばかりで活気に

溢れ、敵に対する勝利に酔いしれ、衰えを知らぬエネルギーに満ち溢れて意気軒昂であったころ、全能の意志に対する信頼感には限りないものがあった。その崇高な力を超えるものはないかに思われた。このイデオロギーを損なうことなくいまに伝えているのがアメリカン・ドリームである。このドリームにとっては、何であれ、あなたがそれに集中して意欲的でありさえすれば、不可能なことは何もない」（Eagleton，2005：訳書161-162）。

さらに、イーグルトンは意志に関して、次のように論じている。

「意志を礼賛するのはアメリカという国が特徴とするものだ。天井知らず、決して不可能なんていうな、その気になればなんでもできる、望むものなんにでもなれる。これがアメリカン・ドリームと呼ばれる妄想なのだ。一部のアメリカ人にとってCワード〔口にしてはいけないタブー語〕は『キャント』（can't）である。アメリカでは消極性は思想犯罪とみなされることがよくある」（Eagleton，2009：訳書176）。

続けて、イーグルトンは意志に関して、次のように論じている。

「意志も、みずからに対して法としてふるまう。全能の神とは異なり、この意志は、事物に支配権をふるう行為のなかで、事物から、その独立した生を圧殺しかねない。みずからのなかに、みずからの根拠と目的とをたずさえている意志という考え方、また恣意的でもなければ非合理的でもないものの、理性に先立つ力（なにしろ、それには、なすべきことをなすという生来の傾向がそなわっていて、いちいち理屈を必要としない）という考え方、これはすでにスコトゥス〔13世紀のスコットランドの哲学者〕のなかに存在している」（Eagleton，2012：訳書29）。

最後に、イーグルトンは意志に関して、次のように論じている。

「意志とは、全能の神に取って代わる近代の産物である。男女ともに、意志の力によって、りっぱなことを成し遂げられるが、しかし、ピューリタンの人びとにとって、男女ともに悪魔の策略に屈しがちであって、りっぱなことを成し遂げるには、とにかく人間は、つねに、尻をたたかれ、拍車をかけられ、唱導され、助言され、説教され、道徳的に威嚇されつづけねばならない」（Eagleton，2013：訳書140-141）。

以上みてきたカントやショーペンハウアー、エンゲルス、テンニース、イーグルトンの意志論に基づき、筆者は意志を次のように定義する。

＜意志とは、自由、自律、無制限を特徴とする人間の創造能力である＞

意志は自由で、自己自身のみを原則としている、つまり、自律的である。自律は自己自身のみへの固執、他者に対する押しの強さをもたらす。従って、意志は自己自身のみに固執するもの、他者に対する押しの強さを持つものである。

また、意志における自由は、自在の意味を含むfreedomとしての自由であり、解放の意味を含むlibertyとしての自由ではない。

ここで、資本における意志、資本主義における意志に関して考察する。

資本主義の基礎である資本とは、自己増殖する価値の運動体である。資本は無制限に自己増殖するという特徴がある。一方、意志には無制限という特徴がある。無制限に自己増殖するという点で、資本には意志が含まれている。

この自己増殖する価値の運動体である資本を基礎とする資本主義にも、無制限に自己増殖するという特徴がある。一方、意志には無制限という特徴がある。無制限に自己増殖するという特徴から、資本主義には意志が含まれている。

また、資本主義には資本の論理が貫徹されている。資本の論理とは、無限の剰余価値の追求と獲得、生産のための生産、蓄積のための蓄積、運動それ自体の継続性の確保という論理である。資本の論理には、無限の剰余価値の追求と獲得という特徴がある。一方、意志には無制限という特徴がある。無限に剰余価値を追求し、獲得するという点で、資本の論理には意志が含まれている。従って、資本の論理が貫徹された経済である資本主義には意志が含まれている。

さらに、資本の論理には、運動それ自体の継続性の確保という特徴がある。この特徴は、資本が自身それ自体の運動の継続性を重視し、資本それ自身の運動の存続を重視していることを表わす。この資本それ自身の運動の存続の重視は、資本それ自身の運動への固執へとつながる。一方、意志は自己自身の

みに固執するものである。資本それ自身の運動の存続の重視、資本それ自身の運動への固執という点で、資本の論理には意志が含まれている。従って、資本の論理が貫徹された経済である資本主義には意志が含まれている。

以上みてきたように、資本主義には意志が含まれている。

7　ブレイクの思想からみた資本主義

４章でみたように、ブレイクは、産業革命当時のイギリスという資本主義社会に対して批判的であり、ブレイクには資本主義社会に対して批判的な思想が見出される。また、ブレイクは、産業革命期におけるイギリスという弱肉強食の資本主義社会において、弱者に寄り添っており、それだけで、ブレイクが資本主義社会に対して批判的であり、ブレイクには資本主義社会に対して批判的な思想が見出される。

ブレイクの思想からみれば、資本主義は煙突掃除という厳しい労働条件を少年たちに課し、格差と貧困をもたらし、資本家階級、ブルジョワジーを含めた特権階級を生み出すものである。これら資本主義が生み出すものは、ブレイクの思想からみれば、怒りや義憤の対象である。従って、ブレイクの思想からみれば、資本主義は怒りや義憤の対象である。そして、ブレイクの思想からみれば、資本主義は批判の対象である。

ブレイクにとって怒りや義憤の対象である少年たちに課される厳しい労働条件や格差と貧困、資本家階級、ブルジョワジーを含めた特権階級は、資本家による労働者の搾取に基づく。資本家による労働者の搾取は、資本の論理である無限の剰余価値の追求と獲得によって駆り立てられる。従って、ブレイクの思想からみれば、資本の論理も批判の対象である。ブレイクは明示的には資本の論理を批判してはいないが、ブレイクの思想からみれば、資本の論理も批判の対象となる。

産業革命以後、資本主義を批判する思想はブレイク以外にもみられる。オーエンやマルクス、エンゲルスの思想がその代表例である。また、思想だけではなく、実際の運動として、資本主義を批判する運動が労働者によって行われた。産業革命以後、労働運動が活発に行われた。産業革命以後の資本主義の歴史は、その輝かしい発展の歴史と同時に、資本主義への批判の歴史である。即ち、資本主義を批判する思想の歴史、資本主義を批判する運動の歴史である。

ブレイクを始めとする資本主義を批判する思想が存在し、さらには、労働者による資本主義を批判する運動が存在するにもかかわらず、資本主義は18世紀後半の産業革命以来、21世紀前半の現在まで存在している。その原因には、資本家が彼ら自身が要求する利潤水準を獲得した上での労働者の賃金の引き上げという資本家による労働者の懐柔、資本家の同意を得た上での国家の福祉政策という国家による労働者の懐柔、資本主義批判のために連帯しなければならない労働者間に生じた分断、資本主義に代替するものとして主張されたソ連型社会主義の失敗等があげられる。しかし、本稿では、これらの原因が重要であることを認めた上で、資本主義に含まれている意志の点から、資本主義が18世紀後半の産業革命以来、21世紀前半の現在まで存在している原因を考察してみる。

ここで、６章でみた意志に関する考察を振り返ってみる。意志は自由で、自己自身のみを原則としている、つまり、自律的である。自律は自己自身のみへの固執、他者に対する押しの強さをもたらす。従って、意志は自己自身のみに固執するもの、他者に対する押しの強さを持つものである。

資本主義には意志が含まれている。資本主義には、無制限に自己増殖するという特徴がある。資本主義には無制限な自己増殖への固執といった意志がみられる。また、資本主義を貫徹する資本の論理にも意志が含まれている。資本の論理には、運動それ自体の継続性の確保という特徴がある。この特徴は、資本が自身それ自体の運動の継続性を重視し、資本それ自身の運動の存続を重視していることを表わす。この資本それ自身の運動の存続の重視は、資本それ自身の運動への固執へとつながる。資本の論理には資本それ自身の運動への固執といった意志がみられる。以上をまとめて論じれば、資本主義には無制限な自己増殖への固執と資本それ自身の運動への固執という意志がみられるということになる。

これら資本主義に含まれる自己増殖への固執と資本それ自身の運動への固執という意志が問題とな

る。ブレイクを始めとする資本主義を批判する思想が存在し、さらには、労働者による資本主義を批判する運動が存在する。しかし、資本主義に含まれる自己増殖への固執と資本それ自身の運動への固執という意志は、資本主義に対して批判的な思想や運動を軽視、もしくは無視する。資本主義に対して批判的な思想や運動を軽視、もしくは無視してまでも、自己を増殖しようとする自己増殖への固執という意志、資本それ自身の運動を続けようとする資本それ自身の運動への固執という意志が資本主義にはみられる。

資本主義においては、無制限な自己増殖への固執と資本それ自身の運動への固執という意志の下、資本家による労働者の搾取が行われる。そして、搾取は、ブレイクにとって怒りや義憤の対象である少年たちに課される厳しい労働条件や格差と貧困、資本家階級、ブルジョワジーを含めた特権階級をもたらす。これら資本主義が生み出す社会問題や社会病理をブレイクやオーエン、マルクス、エンゲルスが批判しても、資本主義は無制限な自己増殖への固執と資本それ自身の運動への固執という意志に捕らわれて、彼らの批判を軽視、もしくは無視する。厳しい労働条件や格差と貧困、資本家階級、ブルジョワジーを含めた特権階級という社会現象は社会問題や社会病理であるが、資本主義に含まれる自己増殖への固執と資本それ自身の運動への固執という意志にも問題がある。

8　まとめ

以上から、次のように結論づける。

ブレイクには資本主義社会に対して批判的な思想が見出される。ブレイクの思想からみれば、資本主義は怒りや義憤の対象である。そして、ブレイクの思想からみれば、資本主義は批判の対象である。ブレイクは明示的には資本の論理を批判してはいないが、ブレイクの思想からみれば、資本の論理も批判の対象となる。資本主義が生み出す社会問題や社会病理をブレイクやその他の思想家が批判しても、資本主義は無制限な自己増殖への固執と資本それ自身の運動への固執という意志に捕らわれて、ブレイクやその他の思想家の批判を軽視、もしくは無視する。

今後の課題として、ブレイクの思想からみた情報資本主義の考察があげられる。情報資本主義は、2019年現在、資本主義の最新の状態である。

以下、情報資本主義に関して考察して、情報資本主義を定義する。

北村は、情報技術革新に特徴づけられた現代資本主義を情報資本主義と呼ぶ（北村，2003：ii-iii）。

また、北村によれば、アイデアや企画さえあれば資本は後からついてくるのが情報資本主義であるというたぐいのベンチャーを持ち上げるような議論や、情報資本主義こそが純粋の資本主義であるといった議論もあるが、情報資本主義は独占資本主義の特殊な一形態である（北村，2003：206）。

半田によれば、情報資本主義というのは、〈知識労働〉を核とする生産者サービスに支えられた、いわばモノ依存を完成する生産システム内蔵型の現代資本主義である（半田，2007）。

また、半田によれば、情報「資本主義」というのは、情報技術を土台として資本蓄積を進めるところにその基底性をもち、ものづくり（製造業）はもちろん、流通販売やサービス、金融、さらに第一次産業の農業や漁業なども情報技術を組み込む形で進展してきた（半田，2019）。

佐藤によれば、知識労働者の情報ネットワークを媒介とした協働が情報資本主義の分水嶺である（佐藤，2010：3）。

また、佐藤によれば、知識労働者とは、理論的には、情報システムに外化された情報を利用して頭の労働に従事する労働者であり、現実的には、外部委託された知識業務の担い手である企業や個人業者、製造工程をアウトソーシングした多国籍企業内の企画・開発部門などの労働者を含む概念である（佐藤，2010：49）。

以上の北村と半田、佐藤の考察から、筆者は情報資本主義を次のように定義する。

＜情報資本主義とは、情報技術革新を特徴とし、あらゆる産業に情報技術が組み込まれた独占資本主義である＞

情報資本主義が登場したのは、1995年のウインドウズ95の発売時である。

以上みてきた情報資本主義のブレイクの思想からみた考察が、今後の課題としてあげられる。

参考文献

Eagleton, T.（2003）*After Theory*, Penguin Books.（小林章夫訳『アフター・セオリー』筑摩書房，2005年。）.

Eagleton, T.（2005）*Holy Terror*, Oxford University Press.（大橋洋一訳『テロリズム　聖なる恐怖』岩波書店，2011年。）.

Eagleton, T.（2007）*How to Read a Poem*, Blackwell Publishing.（川本皓嗣訳『詩をどう読むか』岩波書店，2011年。）.

Eagleton, T.（2009）*Reason, Faith and Revolution*, Yale University Press.（大橋洋一・小林久美子訳『宗教とは何か』青土社，2010年。）.

Eagleton, T.（2012）*The Event of Literature*, Yale University Press.（大橋洋一訳『文学という出来事』平凡社，2018年。）.

Eagleton, T.（2013）*Across the Pond*, W.W.Norton.（大橋洋一・吉岡範武訳『アメリカ的、イギリス的』河出書房新社，2014年。）.

Engels, F.（[1878] 1962）*Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 20*, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag.（大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集第20巻』（『反デューリング論』）大月書店，1968年。）.

半田正樹（2007）「〈情報化〉を視軸に現代資本主義をみる」『季刊経済理論』第44巻第２号，5-17頁。

半田正樹（2019）「グローバル資本主義の「資本主義度」を問う」『季刊経済理論』第56巻第１号，28-40頁。

飯田和人（2016）「近代的企業システムとしての資本」飯田和人・高橋聡・高橋輝好『現代資本主義の経済理論』日本経済評論社，59-82頁。

Kant, I.（1785）*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*.（篠田英雄訳『道徳形而上学原論』岩波書店，1976年。）.

Kant, I.（1788）*Kritik der praktischen Vernunft*.（波多野精一・宮本和吉・篠田英雄訳『実践理性批判』岩波書店，1979年。）.

北村洋基（2003）『情報資本主義論』大月書店。

Marx, K.（[1867] 1962）*Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 23*, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag.（大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集第23巻第１分冊』（『資本論Ⅰa』）大月書店，1965年。）.

Marx, K.（[1894] 1964）*Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 25*, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag.（大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集第25a巻』（『資本論Ⅲa』）大月書店，1966年。）.

松島正一（2004）「ブレイク略伝」『対訳　ブレイク詩集』岩波書店）。

佐藤洋一（2010）『情報資本主義と労働』青木書店。

Schopenhauer, A.（1819）*Die Welt als Wille und Vorstellung*.（西尾幹二訳『意志と表象としての世界Ⅰ』中央公論新社，2004年。）.

Tönnies, F.（1887）*Gemeinschaft und Gesellschaft*.（杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』岩波書店，1957年。）.